

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：12401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26590086

研究課題名(和文)越境する文化・還流する文化 ライトカルチャーの同時性と歴史性の情報論的分析

研究課題名(英文)Culture transcending, culture flowing back: Investigation of simultaneity and history of light culture from an information theoretical approach

研究代表者

山崎 敬一 (YAMAZAKI, Keiichi)

埼玉大学・人文社会科学研究科(系)・教授

研究者番号：80191261

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで日本の若者という限定された受け手を主な対象として生まれてきた日本のポップカルチャーが、現在どうして、世代を越えた、また文化を越えた人気を持つようになったのかを、(i)エスノメソドロジーから生まれた会話分析的な物語論や、(ii)情報メディア論や、(iii)観衆論の視点から明らかにした。この研究では、経験や歴史を伝える物語がどのように語られるかについて研究した。またフランスのジャパンエキスポに出演中の日本のアイドルと日本にいるファンとの交流を、ロボットによって支援する研究を行った。また最終年度には、宝塚や歌舞伎の舞台と、アイドルグループのコンサートを観衆論の観点から比較した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have searched for various social causes why Japanese popular culture today transcends generations or cultures to be appreciated strongly. The analytic approaches we have applied are (i) narrative analysis from a conversational analytic and ethnomethodological perspective, (ii) information and mass media theory, and (iii) audience analysis. This study investigated how narratives which deliver one's personal experience and history to another. We had also carried out an experiment in which a Japanese idol group attending a Japan Expo in France was virtually connected and communicated with the fans remained in Japan through a robot. In the last year of the research period, we had compared idol group performance on the stage with Takarazuka and Kabuki performance. Audience analysis was applied to such a comparison.

研究分野：社会学 エスノメソドロジー

キーワード：エスノメソドロジー 会話分析 ポップカルチャー 観衆論 実況映像メディア 遠隔ロボット

1. 研究開始当初の背景

これまで主に若者に支持されてきたアイドル、ポップミュージック、ライトノベル、漫画、アニメ等の新しい日本文化（ここではこれらを総称して、ライトカルチャーと呼ぶ）が世代を越えて支持を集めるようになってきている。これまでアイドル音楽やアニメ等のライトカルチャーは、不特定多数へのテレビ視聴をもとに広がっていった。また、テレビ視聴を通して学校や家族で共通の話題が生まれ、そこからCDや原作の小説や漫画を買うということが生じていた。現在では、アイドルやアニメ等の音楽・映像コンテンツは、新しい情報メディアを通して、それについての情報とともに、一括化されパッケージ化されたかたちで、若者や少女やオタクといった限定された受け手を宛先にして伝えられるようになってきている。このような状況においては、たとえばテレビ露出の多さから音楽CDが売れるというようなかたちでの流行現象は生じにくくなっている。だがそのような状況においても、当初想定された限定された受け手を越えてさまざまな人々に受容されるコンテンツが生まれる場合がある。この研究では、当初は限定された受け手に向けられたコンテンツが、なぜ世代や文化を越えて越境する場合があるのかを社会学（会話分析）と情報工学の共同研究によってあきらかにしたい。

過去の日本文化の代表的な共同研究としては、村上泰亮・公文俊平・佐藤誠三郎の『文明としてのイエ社会』がある。『産業社会の病理』において、村上は、商品と情報の違いから、情報社会の到来に対して疑問を呈していた。情報は、その商品としての同定の難しさと、伝達されたら終わりですらなる付加価値がつかず、商品としての流通可能性に問題があるとしたのである。しかし、村上の予想に反して、情報社会は急激に繁栄している。また商品としての情報の流通可能性や価値については、情報産業の急速な発達が大きな反証となっている。

本研究は、日本のライトカルチャーに対する社会学者と言語人類学者と情報工学者の共同研究によって、日本のライトカルチャーを日本文化の特有性ではなく、欧米文化との越境性や還流性に着目する。また情報社会の問題を、経済的な視点ではなく、会話分析的な物語論の視点で分析する。

会話分析の創始者である、サックスの物語論のひとつの視点として、同じ物語や冗談が何度もいろいろな人によって語られるということがある。それが可能になるのは、物語全体が情報を内包した形でパッケージ化されるとともに、冗談や物語という包み紙にくるまれた仕方、誰かに伝えられるからである。さらに、会話における物語は、語りかけられる誰かに対する宛先性や、宛先の限定性を伴っている。このように、会話における物語の語りにおいては、物語の中で情報自体が

パッケージ化され、特定の誰かに対する宛先性を持っている。いわば、物語は、情報を入れた小包のように、縮減されずに誰かに届けられるのである。

では、現代社会における情報化とは何であるのだろうか。その一つの特徴は、ある情報への評価が情報自体に内包化されるという点にある。言わばその情報に対する評価自体が、情報の包み紙になっていることによって、他者への再伝達可能性が生まれるのである。1990年代以降の情報メディアの特色として、実況板、YouTube、ニコニコ動画、Ustream等の、映像のコンテンツに評価が加わったものの隆盛がある。現在、実況やそのコメントにおいて、映像コンテンツに対する参加者の評価が無限に反復されるという状態を見ることができ。しかしこうした評価の付加は、宛先の限定性も生んでいる。逆にいえば、宛先のない情報や評価は伝達されない。宛先があることにより、情報や評価が伝達されるのである。このように、情報メディアにおける評価は、宛先性すなわち境界性や限定性を持っている。それは同じ関心を持った、仲間内にしか伝わらないという境界性や限定性を持っているのである。だがある場合に、そうした境界性や限定性を越えたポピュラーな文化（越境する文化）が生まれる場合がある。それは「なぜか？ どういう場合か？」という問題を、本研究では日本のライトカルチャーを対象にして研究する。本研究では、ポピュラーになる（越境する）のは、**ある特定の境界性や限定性**をもっているからであるということ、会話分析や情報論の視点から実証的に明らかにする。

2. 研究の目的

本研究では、これまで日本の若者という限定された受け手を主な対象として生まれてきた日本のライトカルチャーが現在どうして、世代を越えた、また文化を越えた人気を持つようになったのかを、エスノメソドロジーから生まれた会話分析的な物語論や、情報メディア論や観衆論の視点から明らかにすることを目的とする。

本研究では、なぜある特定のコンテンツが越境的な性格を持つようになったのかを、会話分析的な物語論の視点から解明する。

本研究は、対面的な相互行為の分析において、大きな成果をあげてきた会話分析的な物語論の方法を、日本のライトカルチャーの分析、特に情報メディアを通じたライトカルチャーにおける物語の分析に応用した。また、従来、政治集会の分析や会議の分析に使われてきた会話分析的聴衆論の分析手法を、ライブコンサートやインターネットを介した言説の分析に応用した。

3. 研究の方法

本研究では、海外で大きな注目を集めている日本のライトカルチャーがどのようにし

て日本国内及び欧米を中心とした海外で世代や文化を超えた人気を集めているのかを社会学の中のエスノメソドロジー・会話分析の手法と情報科学の手法で分析した。

具体的には次の方法で研究を行った。

(1)アイドル（オレンジポート）のコンサートを撮影し、エスノメソドロジーに基づく聴衆分析を行った。また、アイドル文化の担い手であるプロデューサーやディレクターにインタビュー調査を行った。

(2)地方から世界へということローカル局（テレビ埼玉）のプロデューサーへのインタビュー調査を行った。

(3)動画配信メディア（Ustream）における視聴者と出演者の相互行為について会話分析的な研究を行った。

(4)フランスのジャパンエキスポにおいてアイドルやアニメなどの日本文化の越境についての訪問調査を行った。また、ジャパンエキスポの日本代表にインタビュー調査を行った。

(6)情報メディアによって、様々なエンターテイメントを支援するシステムの開発を行った。

(5)ロボットを用いてファンとアイドルを繋ぐ試みをジャパンエキスポにおいて実施した。

(6)海外で流通している日本のアニメやライトノベルを収集し、どの部分が海外で人気を集めているかを分析した。

(7)物語がいかんして語られるかについての分析を行った。

4. 研究成果

この研究では、主として、①経験や歴史を伝える物語がどのように語られるかについて研究した。また②フランスのジャパンエキスポに出演中の日本のアイドルと日本にいるファンとの交流をロボットによって支援する研究を行った。また③宝塚や歌舞伎と、アイドルの舞台を観衆論の観点から比較した。

①物語の語りについては、『日本人と日系人の物語—会話分析・ナラティブ・語られた歴史』世織書房を出版した。また、埼玉大学東京ステーションカレッジで2016年2月27日に、シンポジウム「混成する文化：歴史と物語の交点」を開催した。この研究では、経験や歴史を伝える物語がどのように語られるかについて研究した。

②また2015年7月5日に、フランスのジャパンエキスポに出演中の日本のアイドルと日本にいるファンとの交流をロボットによって支援する研究を行った。具体的には、ジャパンエキスポに出演した日本の静岡県沼津のローカルアイドルであるオレンジポートと、沼津の地元ファンと、司会ロボットを用いて交流を行う実験を行った（図1、図

2）。この実験ではフランスと日本をテレビ電話でつなぎ、フランス側に設置した埼玉大学のマスコットキャラクター“メリンちゃん”ロボットがメンバーに質問する形式で行った。メンバーは色の違う風船を持っていて、日本にいるファンはその風船の色と同じ色のボードを掲げることでロボットに質問させたいメンバーを選ぶことができる。実際には、ファンの中で意見が分かれるため、より多くのファンが掲げたボードの色に対応するメンバーにロボットが質問を投げかけた。メンバー達は、自分たちの誰が回答者に選ばれるかを楽しみながら回答しており、メンバー同士の会話も弾んでいた。この研究成果は、情報処理学会論文誌デジタルコンテンツ誌に発表した。



(図1) フランス側の実験風景



(図2) 沼津側のファンの実験風景

また2015年7月26日に連続シンポジウム「越境する文化・還流する文化」の第1回として、シンポジウム「境界を越えて—歌舞伎と宝塚の観衆論」を開催した。

埼玉大学人文社会科学研究所のトーヴェ・ビュールク准教授が「江戸の歌舞伎観客と時代を超える歌舞伎の興行と演出」、大阪大学研究員の東園子さんが「舞台上に舞台裏を見る—宝塚ファンの舞台の見方」について発表をおこなった。

このあと、実践家の立場からの基調報告として演劇コラムニスト・劇評家の石井哲夫さんから「宝塚における3つの大きな変化」、独立行政法人日本芸術文化振興会理事であり国立劇場の理事でもある大和田文雄さんから「国立劇場における歌舞伎上演について」、また重要無形文化財保持者（人間国宝）であり国立劇場歌舞伎俳優養成研修所主任講師でもある澤村田之助さんからの歌舞伎の女形としてのお話と現在教える立場になっての講演をおこなった。その後、研究発表者のトーヴェ・ビュールク准教授、東園子さんも加わり、時代や場所を越えた、宝塚と歌舞伎の広がりについての座談会を行った。また2015年11月23日に埼玉大学で 限定性と

普遍性：祝祭としてのアイドル」というシンポジウムを行った。専門家としては文化社会学を専門としている二人の研究者が「祝祭としての日本のアイドル」（清家竜介）と「アジアにおける日本のアイドルファン」陳怡禎について発表を行った。第二部では、『前田敦子はキリストを越えた—〈宗教〉としてのAKB48』（ちくま新書）を出版したアイドル評論家であり情報社会学者である浜野智史さん、ケツメイシやファンキーモンキーベイビーズの作曲家であり現在は、Welcome to Japan project の中心人物でオレンジポートをはじめとするご当地アイドルの世界進出を手掛けている Yanagiman さん、様々なアイドルのプロデューサーをされている桂田誠さんが、日本のアイドル現象とそれがいかにして世代や国境を越えた普遍性を獲得しつつあるのかという問題について基調報告と座談会を行った。

こうしたシンポジウムの成果をもとに、『傾く身体—歌舞伎と宝塚と少女アイドルたちの観衆論』という本を出版する予定である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計7件）

①山崎敬一、小林貴訓、ジャパンエクスポ2015の参加報告と遠隔ファン支援実験、情報処理学会論文誌デジタルコンテンツ Vol. 4 No. 1 i-iii (Feb. 2016)

②島田光基、藤重想、岡田謙一『舞台の流れを意識した演劇自主練習支援』情報処理学会論文誌デジタルコンテンツ (DCON) Vol. 4 No. 1 1-9 2016 査読有

③高津良介、牧宥作、井上智雄、岡田謙一『演奏者別の仮想指揮者による合奏支援』情報処理学会論文誌デジタルコンテンツ (DCON) Vol. 4 No. 1 19-25 2016 査読有

④K. Yamazaki, A. Yamazaki, K. Ikeda, C. Liue, M. Fukushima, Y. Kobayashi, Y. Kuno, “I’ll be there next”: A Multiplex Care Robot System that Conveys Service Order Using Gaze Gestures. ACM Transaction on Interactive Intelligent Systems, Volume5, Issue4, Article No. 21, 1-21, January, 2016. 査読有

⑤山崎晶子、山崎敬一、田丸恵理子、小松盟『ワークプレイス研究と相互行為分析：二つの会議場面の分析を通して』日本労働研究雑誌 57(12) 57-69 2015 査読有

⑥池田佳子『関西大学における国際教育カリキュラムを担う教職員のFD/PD』関西大学

高等教育研究 7 111-119 2015 査読有

⑦池田佳子『アウトバウンド促進授業実践としてのCOIL(オンライン国際連携学習)世界のピアと協働学習を通して生まれる外向き志向』グローバル人材育成教育研究 2(2) 65-70 2015 査読有

〔学会発表〕（計5件）

①Don Bysouth, Keiko Ikeda “Epistemic display in technologically mediated cross-cultural interactions.” IEMCA International Conference (国際学会) 2015. 8. 04 ~ 2015. 8. 07 University of Southern Denmark, Denmark.

②Keiko Ikeda, Keiichi Yamazaki, Akiko Yamazaki, Michita Imai, Tesuo Ono “Multiparty participation and turn allocations in interaction with an avatar robot.” Revisiting, participation Conference, Language and bodies in Interaction (国際学会) 2015. 6. 24 ~ 2015. 6. 27 University of Basel, Switzerland.

③高津良介、牧宥作、権藤聡志、井上智雄、岡田謙一『複数の仮想指揮者によるオーケストラ演奏の支援』情報処理学会 第9回DCC研究会 2015. 1. 26~2015. 1. 26 壱岐文化ホール(長崎県壱岐市)

④藤重想、山崎剛、岡田謙一『人型入力デバイスをを用いた演出家による舞台役者への遠隔演技指導』GN ワークショップ 2014 2014. 11. 27~2014. 11. 28 ニューウェルシティ湯河原(静岡県熱海市)

⑤山崎剛、藤重想、岡田謙一『役者の位置関係・視線方向を考慮した演劇自習支援システム』情報処理学会 第7回DCC研究会 2014. 5. 14~2014. 5. 15 情報セキュリティ大学院大学(神奈川県横浜市)

〔図書〕（計1件）

①山崎敬一・やまだようこ・山崎晶子・池田佳子・小林亜子(編)『日本人と日系人の物語—会話分析・ナラティブ・語られた歴史』世織書房, 2016 総ページ 304(山崎敬一、i-iv、203-215、池田佳子、77-93、216-233)

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0件）

○取得状況（計 0件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山崎 敬一 (YAMAZAKI, Keiichi)
埼玉大学・人文社会科学研究所・教授

研究者番号：80191261

(2)研究分担者

岡田 謙一 (OKADA, Kenichi)

慶応義塾大学・理工学部・教授

研究者番号：80118926

池田 佳子 (IKEDA, Keiko)

関西大学・国際部・教授

研究者番号：90447847